

ある旅の伝説 (3)

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー著
松川 弘*・訳／解説

(平成20年9月11日受理)

Legenden einer Reise (3)

von
Eugen Gottlob Winkler

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 11, 2008)

私が子供の頃それで遊んでいた小さな木馬は、今乗っている馬よりも立派に見えた。しかし、ギラギラする目も、それが硝子玉だとしたら、何の価値があるというのだろうか？

光沢のある皮も、それがエナメル臭いを発するとしたら、年老いてはいるが現実の、完全に生きた馬のそれと比べれば、何の意味をもつというのか？

その馬はある庭師のもので、アルミダという名前が付いていた。私は気が向いたときに彼のところでそれを有料で借りていた。

はじめてその馬に乗る前、私は長い間ためらった。長い間櫛で梳かれたことのないその皮は、怪しく光る縫い目のある着古しの上着を思わせた。つまり、骨が目立っていたわけだ。尾とたてがみは、買い求めた櫛が通らないのが分かるくらいもつれていた。この馬をよく観察するため、私はすでに何度も、朽ちた馬小屋に足を運んだ。馬は薄明の中で幽霊のように立ち、霧やかおりの形で狭い住家を充たす夢に耽っていた。戸外を支配する陽光から引き離されて、この馬は、自分が空中に飛び上がり無味乾燥な島を離れて本土に飛んでいく、あの真夜中の時だけを待っているかのように、たたずんでいた。

ある日、私が馬小屋を再び訪れたとき、私のことが分かったかのように、馬は振り向いた。そして、私が近づくと、

馬はいななき始め、頭を優しく私の腕に擦り付けてきた。鼻をクンクン鳴らし、鼻の穴から長い喜びの息を吐いたので、その仕草に感動した私は、馬を解き放って馬勒を付けてやり、それにロシナンテという名前を付けてやった。

その馬は毎日同じように元気であるとは限らなかった。ロバのように鈍重に振る舞い、だく足で歩き、四つ足の動物の進化の最低段階にまで落ちぶれるようなこともあった。そんな日、私は引き返さねばならなかった。励ましもリンゴも、何の役にも立たなかった。しかし、ロシナンテも、かつての栄光の日々を、小高い乗馬道をもつボプラ並木を思い出すことがあった。かつて鞍に横に坐っていた長いスカートの女性は、色っぽくて尊大で甘たれていた。それを再び思い出したロシナンテは、全力を振り絞って、古風な優雅さと、リドの若々しい風景の中では風変わりでいじらしく見える古くさい上品さを撒き散らしながら速歩で駆けた。私は鞍の下にそのことを感じ取っていた。だが、長く延びた海岸にいるのはわれわれだけだった。われわれの騎行を見てほほえむ者は誰一人いなかった。脱衣場は閉まっていた。われわれの眼前には、手付かずの砂浜が広がっていた。波打際は湿っていて、われわれが戻ってきたとき、ロシナンテのひづめの跡だけが、そこに記された唯一の痕跡としてまだ残っていた。

私は、打ち寄せる最初の波の上を駆けるのが好きだった。

* 広島工業大学工学部電気・デジタルシステム工学科

海水と荒々しい泡が高くほとばしった。それがロシナンテを駆け足で走らせる唯一の方法だった。ロシナンテは海を恐れていた。大波が脚に触れるやいなや突進し、脇に寄ってよけると私が怒ることが分かったと、恐らく早く走ればそれだけ早く海から逃れられるというひそかな期待に駆られて、波の上を疾駆するのだった。

海辺には、日光浴室の奇妙な形の塔が、異教の神々の神殿のように白く異様な姿をさらして立ち並んでいた。そのバルコニー付きの正面は、東から西に向かって、太陽の運行に合うように湾曲していた。われわれが走り抜けたのは、海と空に完全に捧げられた土地、覚醒と期待の土地だった。一足毎に、彼方が近付いてきた。すべてが上昇し、宙に浮かんだ。アカシアや家、柵や旗を立てるマスト、それらすべてが、急に出現した割れ目に取り込まれるように見えた。

波が次から次へと、疾駆する馬の足下に崩れた。しかし、次に近付いてくる波の群れがすでにはるか彼方に見えていた。道、ほとばしる海水、海面に反射する光の眩いきらめきの形をとって、無限のものが私の中に侵入してきた。自分が眩惑され、自分の回りのすべてのものが闇の中に消えるまで、私はそれに視線を注ぎ続けた。私は光のあとを追った。だが、幾ら追ってもそれに追いつくことは出来なかった。乗り手がどんな憧れにとらわれているのか予感したロシナンテは、あらん限りの力を振り絞って突進した。光は、いつも間一髪のところまで身をかまし、先に立ち続けた。先頭の波頭に発し、彼方へ収縮して、再び水平線に向かって広がった光は、剥がれた獣の皮のように海上を漂い、空と水底のあいだで伸ばされて、私の眼前で、私の情熱をあざ笑い、神話の金毛羊皮のような輝きを見せていた。

海、輝き、私が係り合った美しくも珍しくもない事物、馬、獣。すべてが素晴らしかった。それらが何を意味しているのか、今はじめて知ったような思いがした。すべての情熱をかけて世界を自分の内に受け入れ、それを見つめ、その声を聞き取るなら、その中で名もなく生きるすべての事物を自分の意識の中で呼ぶ用意があるのなら、正しく生きることができる私は確信した。

午後、ポツチェ¹⁾をするために六人で庭に出たとき、われわれの回りの全てがその意味を変えていた。私はウディネから来た男の方を見さえすればよかった。彼は、ボールを投じる度毎に、次のゲームがそこから始まるレーンの別の端に向いたが、その巨大な胴回りが歩行の妨げとなって、再び彼が投げる番が来るまでかなりの時間がかかった。目や鼻がほとんど脂肪太りの肉に埋もれているこの不格好な顔の背後に、立派な目鼻立ちの第二の顔があって、それが内側を向いて微笑み始めているのを、私は知っていた。ポツチェをすると、普段外界やそこで自分が占める位

置を観察するときには残念ながら得られない認識に到達することができるものだ。ボールはレーンの上端に無秩序に散らばっていた。それらは、ありきたりの木製ではなく、どっしりした青銅製の古い砲弾だった。熟慮と肉体の消耗により獲得された技能のおかげで、それらのボールが、ゲームの最中に、外から見れば確かに相変わらず無秩序だが、ルールに従ってプレーせねばならない現実においては、そこから勝敗の帰趨が明らかになる絶対的に妥当な秩序の状態に置かれるということが想像できるだろうか？それにもかかわらず、ウディネから来た男が運次第の投球でそれに関与できるということは、彼の肉体の状態やここでは触れ得ないいきさつを考えに入れると、自分が普段はほとんど締め出されていた世界に関わることを彼に可能にしていた。

彼はもう身を屈めることが出来なかった。リノが彼にボールを一個ずつ手渡していた。その金属の厚みの背後に誰にも知られぬナイーブで感じやすい心があることを感じてでもいるかのように、彼は一瞬手にしたボールの目方を静かに量った。念入りに検査した後で彼は再びボールを下ろし、自分にぴったりのボールが見つかるまでその行為を続けた。ボールはまるで人間的な存在であるように思われた。大きさや重さも様々で、それが手に合う人もまた様々だった。われわれの誰もが、自分にぴったりのボールを見つけ出すまで辛抱強い計量、触診など多様な検査が必要であることを知っていた。ボールの硬さを調べてもするように巡査がそれを次から次へと力一杯地面にぶつけているあいだ、リノは戯れに平気な顔をしてボールを二つ同時に投げた。上からの重みが拇指球に加わると腕の関節が折れるのではないかと気遣われた。ここでもまた、普段とは異なる全体への包含が生じていた。晩になるとリノは女友達と一緒に喫茶店で憧れに満ちたサーカスの夢を見ながら時を過ごし、毎晩十時頃、ある日父親のホテルを受け継がねばならないという自分には不愉快な予想に不機嫌になって身を起こすのだった。巡査にしても事情は同じで、犯罪がなければ執務室で意気消沈して退屈しているが、人間的な反抗の事件を上級官庁に報告せねばならないときには、死ぬほど残念がるのだった。ゲームの魔力によって別物に変容し、投球によって直接明確に変えることのできるこの世界では、兩人とも、自分を完全に満足させることが出来たのである。

実際その通りだった。まさにゲームにぴったりの「妻」と名付けられた朱色のみごとなボールを、薬剤師が、少なくともゲームが続いている間は自分を落ち着かせるため偶然に呪術めいたいけにえを捧げでもするかのように、いい加減にレーンの上に投じたとき、目に見える事物の間に、

急に以前よりも信頼できそうな関連が生じてきたように思われた。大地は再び静止し、太陽がその回りを東から西へ動いて行った。太陽は、またしても人間的な存在、連獣を率いたヘリオスと化して、プレーヤーのために、踏み固められ赤味を帯びた地面を照らすのだった。目を上げると、いつもの場末めいた事物の混乱は目に入らなかった。事物の表面は、普段、割れ目と不可解な溝を持ち、揺れ動き、いかがわしさに満ち、状態と原因とに分解していた。だが、今は、バルコニーのある乳白色の家の壁が、明るくくっきりとそこに立っていた。バルコニーの上の開いた戸を通して、住み心地の良さそうな部屋の内部を垣間見ることが出来た。部屋は、確かに闇に閉ざされていたが、日当たりの良いバルコニーの物干し紐には、象徴のように、日に照らされた青い水着が留めてあった。

すべてがより緊密に圧縮され、われわれの回りに不透明な現実の壁を築いていた。キツタの生垣に隔てられた向かいには、隣りの庭が広がっていた。シュロの木が立ち並んでいたが、それはわれわれの庭のものよりいくらか上等だった。別荘のよろい戸は、この十年間閉じられたままであった。われわれの背後には、柵の細かい金網を通して、まっすぐに伸びた道と療養所の正面が見えた。そのバルコニーから、回復期の患者たちが、われわれのゲームの成り行きを緊張しながら見守っていた。彼らはみんな青い縞のある白衣を着ており、彼らに見られていることは、私にとって重苦しく辛いことだったが、彼らは観客として、植物のような、さらに言えば、ラザロ²⁾のような必然性を保っていた。

ボッチェのゲームが生み出す空間は、広がりや隔たりを欠いているが、多くのものに安定を与える。その本質からするとこのゲームは男性的なゲームである。少女や女たちは、事実、深紅色の花を髪に挿し、レース編みのポビンを指に挟んだまま、レーンの端に座って、ボールの行き来を冷静に見物していた。蔓のように自然発生し、その投げやりさにもかかわらず人に不快の念を起かさせない、安らいだ、しかも辛抱強い態度で、レース編みの少女は、華奢な庭椅子に腰を下ろしていた。彼女が、男友達のようにボールの上に身を屈め、目標を狙う丸い物体を手にして、適当な足場が見つかるまで靴底で地面に触れて確かめるなんて、とても想像出来ないだろう。静止状態ではとても美しい彼女の体は、この準備段階では、ひどく思い詰めた印象を与えるに違いない。リュディアはこのことを承知しており、物思いに耽りながら椅子に座り、リノを慰めるため毎晩彼に約束した、一緒にサーカス団に逐電するという自分が永遠に延ばした好機を待つことに甘んじていた。リノは、できるだけ弾みを付けるために、一方の足を前に伸ばし、

距離を置いて、もう一方の足を逆方向に伸ばした。競走のスタートのように見えたが、結局飛び出したのは、念入りに手の中で量られたボールだけだった。

そのボールは全く狙い通りに動き、「妻」のすぐそばで止まった。今まで緊張した態度を崩さなかったリノは、後ろへ下がり、腕や脚をブラブラさせて、誇らしげに挑発するようにリュディアの方を見やっした。彼女は微笑み、レース編みの手を休めず、女神のように椅子に腰を下ろしていた。彼女の姿を見た者は誰でも、この人間の被造物がその神聖な安らぎを自分の周囲に広げている空間に大胆な行動の可能性を見出すために、目標を極端なものや見通しのつかないものに移すことなく、リノがある日その逃走計画を放棄するだろうということを確認せざるを得ない。男性の本質は行動であり、行動を自ら喚起することを彼は好む。彼は行動の統御者たらんとし、その動きがどこまで届くかを測ろうとする。自分が抵抗や失望、疲れを感じるような行動を強いられる他のゲームよりもはるかに明確で認容できるルールで規制されているこのボール遊びは、まさにそうした目的のために考案されたように思われる。年相応に折り畳み椅子に長々と横たわり、スカートが椅子の細い支柱を完全に覆い隠しているのも、まるで魔法で宙に浮かんでいるように見える母親にとって、リュディアの無意識の予感や生涯の経験から得られた確信であった。彼女の夫、ホテルの厨房に辛抱強く育てた新鮮な香味野菜を供給している庭師のエンリコは、自分が投げる番になると、激情家のように振る舞うことを好んだ。ゲームであることを忘れ未知の遠方に盲滅法なポリュフェモス³⁾の投擲を行なうかのように、彼はボールを持った腕をぐるぐる回した。だが、思い直して、遠方に向いていた自分の大胆さを今度は手近な対象に向けると、彼はボールを力強くレーンに投げた。ボールは、コースの初めの部分では奔放に跳躍して進んだが、それから次第に、猛り立ってはいるが抑制された動きを見せるようになった。相手チームのボールがすべてはっきり円を描いて「妻」の間近にあり、われわれの勝利はとても望めそうになかったので、エンリコの投擲に最後の期待がかけられた。彼だけが、相手チームが巧妙に築いた包囲陣を一挙に粉砕することが出来た。彼のボールが目標を過たず「妻」に命中し、一緒に遠くまで転がり、すぐそばに並んで止まった時、このボールは、ささやかではあるがとても望めそうになかった勝利をわれわれのために勝ち取ってくれたのである。

マファルダが最初に、そのふっくらした優美な手（彼女は美人が多いことで有名なキオツジア⁴⁾の出身だった）で、夫の勝利に拍手喝采をおくった。ウディネから来た男は、体を振り子のように揺らして、二人の女のそばを巨大

な船のように通り過ぎたが、彼の湾曲した体の一体どこから前進する原動力が出てくるのか、誰にも分からなかった。彼は、勝利者の妻であるマファルダの前で一瞬立ち止まり、ぎごちなくお辞儀をした。もうひとつの内側に向けられた彼の美しい相貌を想像させる晴れ晴れした顔でウディネから来た男が表わした敬意に対して、彼女は、その若々しく輝く目で魅力的に返礼する術を心得ていた。療養所のバルコニーでは、青い縞のある白衣を来た患者たちが熱狂してブラボーを叫んでいた。

ボールがレーンの上をあちこち転がるたびごとに一定量の時間が経過したが、それは、時間を計測するときによく感じられる切ない萎えたような感情を生じさせることはなかった。時計の針の動きを目で追うとき、私はいつもある司祭の言葉を思い出す。宗教の授業で、彼は、学校の鐘が鳴る瞬間にもわれわれが刻々死に近付いていることを指摘して、子供たちに現世の事物のはかなさを説明した。これを思い出すたびに、私の体には昔の恐怖が走るのだった。

しかし、プレーヤーはそうした恐怖を免れていた。終端まで来ても、ボールは自分が必要とする時間をほんの束の間ではあるが前進の手段として利用しているように見えた。ボールが目標を外しても、不幸なプレーヤーを襲う幻滅は、取り返しのつかない損失の苦い感情を伴わなかった。暇つぶしの喜びと、その暇つぶしに専念するすべての者に生気を吹き込む決して尽きることのない永遠の感情が、そうした思いを完全に抑え付けていた。時間を二度と戻って来ない瞬間の果てしなく続く連鎖と見なす鋭敏な感覚に代わって、ボールと事物の永劫回帰のイメージがあらわれた。ゲーム中に過ぎ去る時間はいずれにせよ同じものであって、使い古されることもなく、各々のボールによって常に新たに利用されたのだった。ゲームが行なわれる現実はどこちみち時間の影響を受けなかった。私が見つめたときにはいつも、マファルダとリュディアは、遙か大昔からずっと母と娘であったかのように、何の変化もなくそこに座っていた。それは、人間の生の永遠に持続するイメージを想起させた。エンリコが妻と来る日も来る日も暮らし、ボールがいつも同じ向きに走るように、同じ日を常に新たに始め、そのことですべては変わらないと信じるに至ったとしても、それで十分ではなかっただろうか？毎晩、二人はテーブルを挟んで向かい合って座り、お互いの顔を探るように見つめていた。エンリコが妻の額に水平の皺ができるのを見るのは、いつのことだろうか？

この瞬間、マファルダは、今まで肩の上に掛けていた黒いレースのショールをつかんで灰色になった頭の上まで引っ張り上げた。私がつぶくりして見ている内に、木々の影が突然長くなり、涼しい隙間風が起り、まぶしい家の壁

がくすんだ黄金色と化した…

今度は、巡査が最後のボールを投げた。われわれのボールが一つ「妻」のすぐそばにあったが、巡査の投げたボールはそれに触れんばかりに近付いた。そこから程遠くないところに、相手チームのボールが二つあった。

形勢は難しかった。巡査は長い間熟考し、投げるのをためらっていた。ウディネから来た男を除いて、われわれは全員、すでにレーンの終端に集まって、ボールがやって来るのを待ち受けていた。その時、木の枝から枯れ葉が一枚落ちて来て、われわれに急に季節の変化を思い出させ、緩やかに渦巻きながら地面に落ちた。その枯れ葉は、そこで冬の間そっと腐っていくつもりであるかのように、二つのボールの間に横たわった。ボールは密着していたし、雨や風が容易に動かせぬほど重かった。その間に落ちた枯れ葉は、ボールに保護されて何にも邪魔されずに分解していきえるように思われた。ボールの影は互いに接触し合っていて、秋雨が降り始めると、その下の地面は長い間湿ったままになっているに違いなかった。

ボールはその位置を永続的に頑として変えないように見えたが、われわれには、その配列はいずれにせよ一時的な状態に過ぎなかった。この枯れ葉は、ボールの進路を妨げはしないだろうか？障害になる恐れは十分あったので、薬剤師がそこにやって来て枯れ葉を注意深く脇へ押しやっても、誰一人驚かなかった。

巡査は相変わらずレーンの上端に立って熟考し、適当な足場を探していた。微風が起り、レーンに吹き下ろした。今にもボールを投げようとして上半身を突き出し曲げている巡査の背後で、彼の窮屈な仕立てのスラッシュの入った上着が突然、二枚の羽根のようにこわばって突出した。そのため、彼の姿はほんの少しギリシアの神の使者を思わせた。微風がかすめ過ぎるのが感じられた。われわれは顔に風が触れるのを感じ取った。それから風はボールの上に吹き下ろした。裾をたくし上げた愛くるしい風の精が、私にはありあり見えるように思われた。風の精は、薬剤師がたった今取り除いたばかりの枯れ葉をつかみそれを元の場所に戻したのだった。

薬剤師はビクツとした。歯の間から呪いの言葉を吐き出し、顔を真っ赤にして立腹しながら、彼は身を屈め、葉を拾い上げて、白昼にもかかわらず出現した神秘的な力を信用しないかのように、その葉をさっとズボンのポケットに突っ込んだ。枯れ葉は、今や思いがけず暗闇の中に引き込まれ、煙草入れと擦れあった。薬剤師は、ゲームが終るたびにその煙草入れをポケットから引っ張り出して、そこから嗅ぎ煙草をひとつまみ取り出すのだった。また、枯れ葉は硬貨ともぶつかり合ったが、その硬貨は、ホテルのビュ

ツフェで食前酒代を払うときポケットを引っ掻き回して取り出せるように、薬剤師がばらで入れておいたものであった。葉は脆く、枯れ萎れていた。だから、時が経つうちにそれが硬貨によって擦り碎かれることは必至だった。薬剤師は男やもめで、女嫌いで通っており、自分で家事を切り盛りしていた。枯れ葉がこの牢獄から再び解放される見込みはまずなかった。彼のズボンの面倒をみる者は誰もいなかった。古びて薄汚くなったそのズボンにはリノの仕立屋がやけくそになって付けたコルク栓の栓抜きのような形の折り目があり、いやいやそれをはいている持ち主の体に絡み付いていた。夏を越し、他の何千もの葉と同様にプラタナスの梢で光に撫でられて輝いていたその葉は、何ら異常なことも起こらないのに、救いようもなく、全くもって葉らしくない運命に陥ったのだった。それを返すよう、私は薬剤師に頼むべきだったのだろうか？ われわれのゲームのデリケートな進行を妨げないように、それを庭の隅の土の中に埋める保証を彼に求めるべきだったのだろうか？ 彼にはきっと、私が何を言っているのか分からなかっただろう。彼は、分厚い眼鏡のレンズ越しに、レンズを通して見えるほど膨れてはいない小さく鋭い縁の赤い目で私を見つめ、ポケットに葉を突っ込む者がそれを再びそこから取り出すとする者と同じくらい異常であることを見抜けずに、私を馬鹿呼ばわりするに違いない…。この世には他の出来事の進行を妨げないような出来事は恐らく存在しないと考えた時、不快の念が私を捉えた。

巡査はとうとうボールを投げた。同時に、われわれは、その狙いがわれわれのボールをその位置から押し出すことにあるのを知った。進行中に目立って推進力を失うこともなく程よいテンポでボールは近付いてきた。その背中には秋の陽光が流れるような金の円環を描き出していた。まるで自分の思念でその動きをコントロールしようとしているかのように、ボールの上に身を乗り出して、懇願するような言葉を吐き、身振りを示しながら、巡査は大腿でボールに付き従った。ボールが相手方のグループに近付いたとき、その到着を見定め、その作用をより良く評価するために、彼は一飛びでボールを追い越した。

事実、それは見事な投擲だった。ボールが目標に到達する前に、薬剤師は歓声をあげて喜んだ。軽い衝撃があり、カチッという音が聞き取れた。われわれのボールは、相手方のボールに丁重に頼まれたかのようにグイッと動き、ほんの少し脇にどいてくれという促しにできるだけ早く応じた。相手方のボールが幸先の良い位置を占めるには、それだけで十分だった。われわれは敗れ、勝者は笑った。だが、われわれは澄み切った心で彼らの快活さに調子を合わせた。

思考とイメージが現われた。私は見た…。

私は何を見たのだろうか？ 自分が入り込んだ見知らぬ町、気が狂ったように振舞う人々でいっぱいの広場、壁が灰色に塗られた待合室、その中で私は一人きりで待っていた。私は待つ人生を送らねばならなかった。ドアは決して開かなかった…。

激しい不快感が私を襲い、眠りの力が次第に失われていった。早朝になっていた。どんよりした薄明が外界を支配していた。いつもなら海が広がっているところに、霧が横たわっていた…。

見知らぬ女が虚空に立っているのが小さく見えた。彼女は、私の方に向かってやって来た。退屈した愚かな彼女の歪んだ顔が、空のように大きく私の上に覆いかぶさってきた。『フニクリ・フニクラ』が流れ、鳩が首を絞められて死に、乞食が捕らえられた。彼らは楽しげに羽目を外して、馬鹿げたリフレインを大声で歌った。私の目の前には、一見したところ革製の、模様が刻印されたトランクがあった。それは開いたままで、内側には花模様のある紙が張られていた。洗練された人物の日用品がそこから溢れ出ていたが、よく見ると、それはちゃちな安物だった。トランクの取っ手の小さな名札には、「セールスマン X. Y.」と書かれていた。…神聖な信念を持っているように装って自分が信じてもないことを行なう悪人や、じっくり考えることが怖いばかりに自分の行為を信じようとする善人が、私の目の前にいた。彼らの頭上に、栄光に輝き微笑みながら、厳格で有能な現代の英雄がそびえ立っていた。彼は、御し難い生よりさらに反抗的で、死も悪魔も恐れず、日々の栄光の中で死ぬか、あるいは惨めに没落していく。彼は、勇気を失うこともなく、その運命に甘んじる。彼のことを知らぬものがあるだろうか？

兵士は、大戦後銀行員となり、解雇されてヨーロッパ中を放浪し見聞を広めた。ハンガリーでは穀物の取り入れを手伝い、物乞いさえた。船の火夫になってアメリカに渡り、懸賞付きのボクサーや映画スターになった。途方もなく大金持ちの女相続人と結婚して、教養の遅れを取り戻そうと大学で学んだ。銀行の倒産で財産を失い、金鉱掘りとしてクロンダイク⁵⁾に行き、金持ちになって戻って来るか、飢え死した。そんな偉丈夫が微笑みながら姿を消した。そして私は、ずっと以前に故国の祝祭で出会った若者を再び目にした。あの時は夜だった。パレードが終わって、若者たちの小さな行列が、私の知らない命令に従い、黙って暗い通りを進んでいた。かたわらを歩いていた私は、街灯の輝きの中に、あの忘れ難い美しい顔を見たのだ。そこに

は、男らしさと少年っぽさが入り混じっていた。顎と口のあたりには、決然とした態度がうかがわれたが、額は、まだ子供のように純粋に自意識なしで人生に向かい合っていた。ありそうもないもの、もはや信じられぬものが、友情と勇気、愛、優雅、高貴な人物の肖像が、この素晴らしい若者の中で復活しているように思われた…あの夜の通りで、今なお私を動揺させる恐ろしい情景が突然現出したのは、ちょうどその時だった。彼の面相が破壊され、額と口とがひどく引き離され、細切れにされるのが見えた。…目は硝子玉のようにこぼり全身が血まみれになっていた。喧嘩だった！

霧がわき起こった。重い鉛のような負荷に濃縮されて、それは海上に垂れ籠めた。視界を遮るものは何もなかった。平らな海面に、夜の漁から戻ってきた漁船の輪郭がとても明確に浮かんでいた。

微風が起こった。今までエンジンで走っていた漁船の上には、ゆっくり帆が張られた。それは、目覚めた悲しげな小鳥が翼をはばたかせている様を思わせた。陽光に照らされて黄色に、金褐色に映えていたそのカンバスは、今や黒くくすんでいた。

脱衣場のあいだの砂浜にコートをはおったひとりの男が姿を現わした。彼は帽子も被らず、裸足のままだった。

彼は軽やかにスキップしていたが、その動きは、それを批判的に評価する周囲の群衆に向けられたものであるかのように、わずかに様式化されていた。彼は、地面が湿り始める所まで砂浜を横切って行った。海は夜の内に少しだけ後退していた。あらゆる種類の海の生き物の死骸があちこちに散乱しており、砂の湿った塊がまだ、素早く動く水の流れの刻印を残していた。

その男は、はおっていたコートを地面に投げ出した。彼は、すべての動きに舞踏の意味を付与しようと努めていた。最初から最後まで、どの動きもできる限り生き生きしたものにしようと考えているようだった。

彼はコートの下には何も着ていなかった。彼の体は、力強くもなければ強靱でもなかった。闘いを始めるまえに相手が彼のもつ能力を評価することは難しかった。彼を地面に投げ倒すには、不用意な一撃があれば十分だった。しかし、彼を打ち負かすことは出来なかった。

湿った砂の上をゆっくり前進しながら、その男は自分の四肢をつくづくと見ていた。こぶしで自分の胸をどンドン叩き、腕の筋肉を緊張させた。彼はそのことを不思議に思い、同時にそのことに満足しているように見えた。無言で笑いながら、彼は漁船の方を見つめていた。

「あと半時間もすれば、あの船は通りかかる。ここから千メートルの間隔で通過するだろう。よし！」

彼の足は海水に触れた。それはもう冬の海のように冷たかった。体を動かして暖まるために、彼は力強く跳躍しようと身構えた。あらゆる方向に崩れ落ちる水柱の真ん中で、彼は海の中に駆け込んだ。膝の上まで水が来たとき、彼はもう一度跳び上って水に潜り、頭を上下に動かしながら大きなストロークで前進していった。

海岸はすぐ後ろになった。ときどき彼は振り返ってみて、岸からの距離が増しているのに気づき、満足した。狭い砂の縞はもう見えなくなり、脱衣場も浮かんでいるように見えた。だが前方では、漁船が同じ位置で動かずにいた。

彼は、時々休むために仰向けに浮かんだ。波はかなりの高さに達していた。その波をいつもうまく乗り切ることができるとは限らなかった。息を止めて波頭が去るのを待たねばならないこともあった。次第に疲労が募ってきたが、状況を見るためにしばらくして再び跳ね上がるだけの力を、彼はまだ有していた。やった！漁船が近づいてくる。彼は船員たちの姿をはっきり見ることが出来た。小さな姿が船内で何か作業している。新たな力を込めて、彼は大きく抜き手を上げた。

「一時間は泳いでいられる」と、彼は思った。「あれから、どのくらい時間が経ったんだろう？一時間は経っていないが、半時間以上だろう。もう疲れた。」

それから、彼の力が衰える時がやって来た。「休むのだ。興奮するな。落ち着きを失うな。」そう自分に言い聞かせ、彼は静かに仰向けになって浮いた。大波が頭上を通っていくたびに、彼は脚を力強く蹴った。しかし、二、三の波が彼を叩いたとき、もう浮き上がることが出来なくなっていた。再び浮上し息を継ぐには、全力をあげてほとんど絶望的な努力をする必要があった。うっかり呑み込んだ塩水が吐き気を引き起こしかけていた。目が痛み、彼はもう鼻で呼吸することが出来なかった。至る所から刺すような海水が侵入してきた。三つか四つの波が、さらに彼の頭上を通り過ぎた。彼はもはや浮上出来なかった。「水中では、笑えないだろうな」と、彼は思った。「俺はすっかり落ち着いている。もう沈んでいるのだろうか？空気が足りないと、無感覚になるんだな。」

幸運なことでも、それが不意に生じると、危険と同様に人は度を失い、怯えるものだ。その感情は、最初の瞬間、見分けがつかない。そんなわけで、この疲れ切った泳ぎ手も、その脚が突然何かを蹴ったとき、喜ぶよりもむしろ肝をつぶした。それはほんの一瞬の出来事だった。流れが再び彼を連れ去った。だが、しばらくして改めて接触を感じたとき、彼はそれに慣れ始めた。意志と抵抗力が目覚め、彼は事態を把握しようと努力したが、まだそれは不可能だった。底はあまりにも深かった。しかし、もう数ストロー

ク前に進むと彼は立つことのできる所に到達した。

彼は立って、頭をわずかに鏡のような海面の上に出し、疲れ果てあえぎながら呑み込んだ海水の残りを吐き出していた。彼は数歩よろめきながら前進した。すぐに水位は腰のところまで下がった。

状況ははっきりしていた。彼は浅瀬に踏み込んだのだ。彼は漁船群とほとんど同じ高さのところにいる。だが、彼が一番近い船は、相変わらず彼の左手かなりの距離に位置していた。彼は南に進み過ぎたようだ。どうしたらいいのだろう？彼の力は尽きていた。戻ることは出来なかった。叫んでみようか？船上まで声が届くだろうか？それは不正行為、彼が戦いを挑んだ相手に対する欺瞞ではないのか？確か、不可視の偉大な存在は、すべてを黙って耐え忍んだではないか。だが、それは何という勝利だろう！

水が顎のところまで達するまで、彼は浅瀬を横切った。「気確かにもて。諦めるな。」許されているように思える唯一のことは、漁船が近づくまで待つことだった。先頭の船は浅瀬からただか百メートルのところを通過していた。

漁船群は音も立てずに次々に帆走していった。風は弱く船はごくゆっくり進んでいた。割合確実に到達できると思われるところまで先頭の船が近づいたとき、彼は再び泳ぎ始めた。

手足の指が硬直し、冷たい水が彼を取り巻いた。動きがすべて苦しみに通じていた。息が切れ、止まり、時折意識が失われた。波を乗り越えることは出来なかった。波が三つ四つ続けて彼の上を通り過ぎていった…

圧倒的な力で捕捉された彼は、眩暈と高揚を感じていた。高潮が彼を捕らえ、運び上げたのだ。彼を高々と持ち上げ、ゆっくり下に滑り降ろした…ドクドクという音が彼の耳に押し寄せてきた。それが何の音か、彼には分かっていたのだろうか？

羊飼いや船乗り、僧侶、綱渡り師、女たち、農夫など何千もの人々の心臓の鼓動が重なり合ったような響きがあった。船上ではエンジンが始動していた。人々は彼に気付いたのだろうか？

例の音はずっと続いており、ますます強くなっていた。帆に風をはらませて、高く大きく黒い生の寓意、船が近づいてきた。

男たちは準備を整えていた。ロープが振り回され、海面にパシャリと落ちた。彼はそれに手を伸ばし、掴み、しっかりしがみ付いた。身を任せている波の動きに相反する動きが彼をとらえた。彼は甲板に引き上げられた。

訳注

1) 戸外のコートで金属製のボールを標的用の木製の小球

(パリノ)の至近距離に近づけて得点を争うゲーム。味方のボールを相手のボールよりもパリノに近い位置に置くために、相手のボールを弾いたりすることも重要な技術となる。イタリアはもとより、南フランスや北スペインでも国民的なスポーツとなっている。

- 2) 『ヨハネによる福音書』11章によれば、ラザロが病氣と聞いてベタニアにやってきたイエスと一行は、すでにラザロが葬られて4日たっていることを知る。イエスはラザロの死を悲しんで涙を流す。イエスが墓の前にたち「ラザロ、出てきなさい」というと死んだはずのラザロが布にまかれて出てきた。このラザロの蘇生の奇跡は、人類全体の罪をキリストが救済し生に立ち返らせることの予兆として解釈されている。
- 3) オヴィディウスの『変身物語』によれば、海神の娘で海の妖精であるガラテアは、川の妖精の息子アーキスと恋に落ちるが、前々から彼女に恋い焦がれていた海神の息子で一つ目巨人ポリュフェモスがそれを嫉妬し、投石してアーキスを殺してしまう。
- 4) ヴェネツィアの南方57キロ、アドリア海に面するヴェーネト潟湖南岸の小島に位置する港湾都市。
- 5) 19世紀末にゴールドラッシュでにぎわったカナダ北西部の町の名前。

解説

『ある旅の伝説』は、オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラーが1935年10月、3週間にわたっておこなったヴェネツィア方面への旅行の所産である。これは、彼の4度目のイタリア旅行にあたる。彼は、雑誌「内面の国」の依頼に応じて、同年の11月から12月にかけてこの作品を執筆した。

トルチェッロ、ヴェネツィア、リドなどを舞台としたいくつかのエピソードからなるこの作品では、旅先のさまざまな滞在地が、緻密な象徴的表現で、いわば進行する認識の節目として描き出されているが、そこでは、「遊戯」(Spiel)のモチーフがきわめて重要な役割を果たしている。ユートピア的な生の象徴である遊戯は、同時に、時のかなさを止揚し死の力を克服する芸術の象徴でもある。ここでヴィンクラーは、死の克服という彼の全作品をつらぬく問いにたいして、ひとつの答えを提示しているように思われる。

「遊戯」のモチーフは、ヴィンクラーのいくつかの作品に見出せるが、その意味は絶えず変化している。初期の抒情詩では、このモチーフは、つねにマリオネットのモチーフとの関連であられ、人間の自動人形的な性格と結び付けられている。次いで、人間の生の遊戯的な性格が強調さ

れるようになり、これがいわゆる「世界劇場」のモチーフに発展していく。

『トリナクリアの回想』の終末部では、遊戯のモチーフが変形されて再び姿をあらわしている。舞台はセジェスタの古代ギリシアの劇場跡、演技するのは一匹の雄山羊である。これについては、ヴィンクラー自身が、そのディオニュソス崇拜的な性格を指摘し、「山羊は、ヨーロッパ精神の悲劇を演じている」(B187)と明言している。悲劇として把握されたヨーロッパ精神の歴史は、自分自身のために演じられる遊戯と化す。「平静な天空」のもとで進行するそれは、遊戯以外の意味をもたない。ここには、「世界劇場」のモチーフの現代的なヴァリエーションが認められる。バロックの世界劇場が人間を遊戯に引き入れることによって讃えた神は、ここではもはや姿を消しているのである。

『ある旅の伝説』の第8章で、遊戯のモチーフはまたしても人間存在の象徴となっている。

古来、遊戯の衝動を人間の文化の根本動因と考えた思想家は数多い。たとえば、シラーは、あらゆる人間の文化、とりわけ文学や音楽、美術などの芸術一般には、まぎれもなく遊戯の要素が含まれており、人間の創造の衝動とは、遊戯の衝動に他ならないとする。彼によれば、人間は「彼が完全な言葉の意味において人間である場合」にのみ「遊戯し」、「人間は遊戯する場合においてのみ完全な人間なのである。」

オランダの文化史家ホイジンガも、その著『ホモ・ルーデンス』(1938年)で、遊戯を人間存在の要因としてとらえている。

彼によると、遊戯は、いかなる実際的な目的も追求しない精神的もしくは肉体的な行為であり、この行為の唯一の動因は、行為そのものへの悦びである。また、遊戯は、すべての参加者によって承認された特定の約束や規則、成功をもたらしてもすれば失敗をもたらしても、得になることもあれば損になることもあるルールにしたがってなされる行為である。

遊戯の第一の動因、つまり無目的性、あることが成っても成らなくても、それとはまったく無関係な、行為そのものへの悦び、これは遊戯を、創造的なもの、芸術的なものへと近づける。

さらに、特定の規則に縛られた行為という遊戯の性格は、それを、宗教的なものに接近させる。遊戯は、宗教行事と同じように、時間と空間の等質性を止揚し、独自の、それ自体完結した小宇宙を作り出すことによって、その遊戯に参加している人間を、日常の世界から切り離してしまう。

ヴィンクラーの描写は、このホイジンガが遊びについて下した定義を想起させる。

すべての事物や人間が自分に割り当てられた位置を占める、ゲーム中に成立したこの秩序のもつ意味は、人間には隠されている。人間が生きることを強いられている現実の世界は、見通しが利かず、人間を強制的に矛盾のなかに連れ込む。これにたいして、人間の創造物としてのゲームは、より純粹で、より人間にふさわしい秩序の性格を具えているといえる。

遊戯が生ユートピアを実現して、生の領域が人間にとって見通しが利くものとなる時、現実の世界は変容可能であることが明らかになってくる。人間自身の力で生じたこの変容は、彼に、自分の機能を悟らせる。遊戯の秩序と変容可能な世界の類比は、人間が遊戯におけるようにこの現実の世界においても自分にふさわしい位置を占める可能性を生じさせる。

そうした変容がどのようにして可能になるのか、ヴィンクラーはその答えを保留している。彼はその可能性が存在するという事実だけを確認しているのである。遊戯は、秩序ある世界の象徴と化し、そのなかで、実生活や創作活動で絶えず彼を煩わせているすべての問題が解決されているのだ。ヴィンクラーがこの『ある旅の伝説』でゲームの記述により切り開いた次元は、遊戯が、彼が文学戸取り組むことによって回復することを狙ったユートピア的な世界を具現していることを明らかにしている。

遊戯においては、経験可能なものもまたその輪郭を変える。遊戯が「目に見える事物のあいだに」「以前よりも信頼できそうな関連」を確立することによって、世界はいわば古典的な秩序を取り戻すのである。

『トリナクリアの回想』におけるセジェスタの神殿の場合と同様に、少なくともゲームが続いているあいだは、それによって目に見えるものとなった現実がカオスを克服する。ここでは、人間がその支配を受けている別のカテゴリー、時間の破棄もまた生じている。

時間のはかなさが、遊戯のなかでは破棄されているのである。遊戯は、時間に拘束されない持続的な存在を確立するが、それはヴィンクラーの作家としての努力目標でもあった。永続的なもの、秩序の内部で不変なものの象徴として、遊戯のなかでは、時間とともに死もまた破棄されることになる。

遊戯のカテゴリーの内部で無と現実、時間と存在の二律背反が示されるとき、遊戯は、現実を創造することではかなさを破棄し死の力を克服する芸術の象徴、ユートピア的な世界を内包し目標としてそれを描き出す芸術そのものの象徴となるのである。

底本として、次のものを用いた。

Winkler, Eugen Gottlob: Dichtungen, Gestalten und Probleme. Nachlass. In Verbindung mit Hermann Rinn und Johannes Heizmann, hrsg. von Walter Warnach. Pfullingen 1956.